博士学位論文要旨

論文題目(和文):宗教教育におけるナラティブ・ペダゴジーの理論と実践ー学修者における text と context の調和を求めて

論文題目(英文):Theory and Praxis of Narrative Pedagogy in Religious Education: Toward a Harmonization of Text and Context in Learners

氏名:徐有珍(そ　ゆじん)

本研究は、連続性と変化、また伝統と改革といった宗教教育における複数の教育目的の間に調和をもたらし、そこにある「text と context の断片化」という課題を解決することが期待される、ナラティブ・ペダゴジーという宗教教育方法論の理論背景と、その実践的有用性を検証するものである。

ナラティブ・ペダゴジーは、欧米、特に北米において 20 世紀後半から強調されるようになった能動的教育方法のアプローチのひとつである。背景にあって、それを力強く推進する役割を果たしたのは、封建的な従来の教育方法のありかたに疑問を呈した教育界や宗教界、さらには心理学界からの圧力であった。米国の哲学者で教育学者のジョン・デューイや、南米出身の教育学者パウロ・フレイレは、教師主体で繰り広げられる教育の形を、それぞれ非実用的、そして抑圧的として批判し、学修者の能動性に焦点を当てた教育の形を提唱した。プロセス神学の父とされるアルフレッド・ノース・ホワイトヘッドや、ナラティブの神学を提唱したハンス・フライ、スタンリー・ハワーワスらも、旧態依然とした一方向的な世界観や、そのような神学教育的アプローチとの決別を説いた。旧ソヴィエト連邦の心理学者レフ・ヴィゴツキーは「足場かけ」の概念を用いつつ、教師の重要な役割を、学修者が自分の興味と能力の中で熱意と共感を発揮できるように動機を与えることであると語り、また心理発達の理論を展開したエリック・エリクソンやジェームス・ファウラーは、教える立場にある者の役割を、「発達の段階」を登る助け手として定義した。

本研究では、伝統的な教育に対する上記のような批判を背景にしつつ、現代を代表する以下の 4 名の宗教教育学者による、物語を用いる教育方法、すなわちナラティブ・ペダゴジーに代表される能動的な宗教教育論の展開が紹介されている。トーマス・グルームは自由を宗教教育の中心に据え、教育者と学修者の双方向的な関わりの必要性を強調した。マリア・ハリスは、自発的学びを励ます教育者の必要性を語り、さらには宗教教育の根幹に、想像性と芸術性という要素を取り入れつつ、ナラティブ・ペダゴジーの役割を明確化した。メリー・エリザベス・モアーは、プロセス神学が強調する有機体の神学をベースに、宗教教育における多角的な対話の機会に注目しつつ、ナラティブ・ペダゴジーの有用性を説いた。フランク・ロジャースは、それまでのナラティブ・ペダゴジーの理論的展開を念頭に、その実践的意義と注意点に注目し、現場の教育者に

対して意義深い取り組み方を語った。

以上の理論的背景を踏まえ、本研究では、ハイディ・ジェイコブスの教育課程デザイン、およびトニー・ブザンの提唱したマインドマップを採用し、ナラティブ・ペダゴジーの有用性を検証すべく、その方法論を用いた宗教教育クラスが企画された。検証のためのデータ収集の場所として選択されたのは、研究者の所属する東京基督教大学（千葉県印西市）のクラス学習の現場である。研究者は、クラスを担当する教員と履修する生徒の双方からの協力を得、2013 年から 2015 年の 3 年間に渡ってナラティブ・ペダゴジーを用いた教育を実施し、学修者の観察や、アンケート調査を通して質的なデータを収集した。データの収集に用いられたのは、質的研究における代表的な方法論のひとつであるグラウンデッド・セオリーである。また対象となったのは、主に高校を卒業したばかりの大学1年生で、選択されたのは、新入生を対象にし、キリスト教の基本的な教えや価値観を取り扱う「キリスト教世界観」というクラスであった。

収集されたデータは、やはりグラウンデッド・セオリーを用い、研究対象者の内面に起こった「発見」や「変化」という観点から分析された。宗教教育学の観点から、そこに以下のような教育効果が確認された。それらは、「主題に対する態度の変化や認識の拡張」、「主題に対する理解の深まり」、「学びにおける自主性の向上」、「意見や価値観の多様性への目覚めとその興味深さの発見」、「他者とコミュニケーションをとる場合の心構えやスキルに関する発見」、「他者理解・受容・協働に関する発見」、「共感性の醸成」、「共同体意識の向上」、そして「知識と経験の連結」であった。またマインドマップの使用に関しても、個々の学修者の中に、宗教的概念に対する新たな気付きをもたらしたことが見出された。

データ分析の中には、重複する点も存在するが、ナラティブ・ペダゴジーを用いた宗教教育の実践の結果から明らかにされたのは、学修者がナラティブ・ペダゴジーを通して自らの世界を広げ、そしてなによりも示された text と自らの context の間に調和を見出すことができたという現実である。彼らの多くは、授業において提示された主題と向き合い、さらには選ばれた text と格闘することを通して、それまで自分の中にあった狭い考え方や偏った価値観に気付かされていった。また意識することの無かったクラスメートの価値観の多様性に対してもそれをポジティブなものとして受け入れ、さらには他者との共同のために必要なスキルに対しても、いが及ぶようになっていったのである。

本研究は、グラウンデッド・セオリーという研究方法論の制約を受けており、したがって検証対象の幅が狭く設定されている。しかしそこから明らかにされた結果は、科学的根拠の薄いものとして安易に否定されるべき内容では決して無いであろうと研究者は感じている。今後ナラティブ・ペダゴジーの実践的検証が積み重ねられ、多くの宗教教育機関において活用されることを願ってやまない。